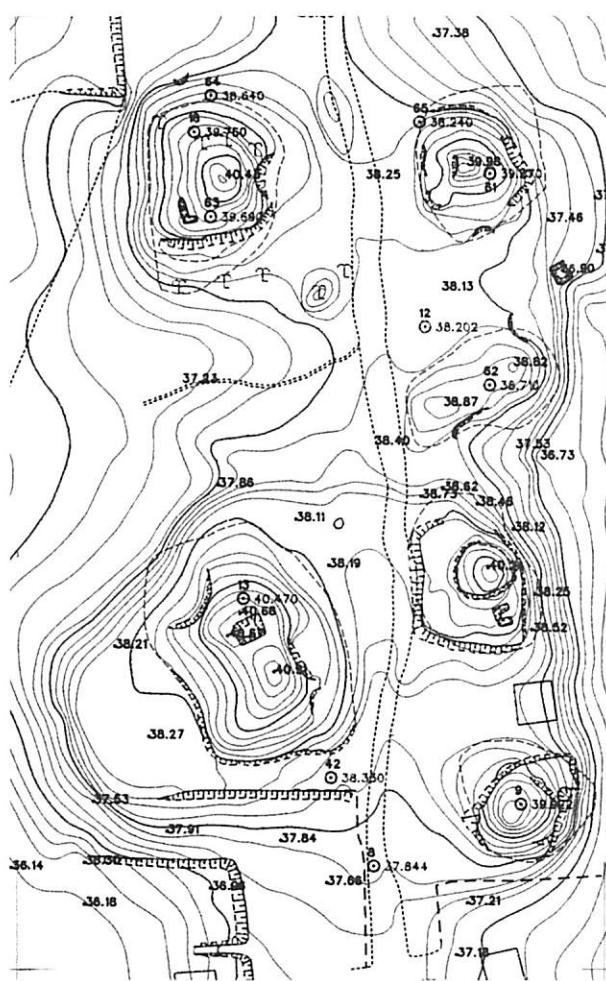


5. アンコール文化遺産保護共同研究事業

1998年度は、1995年に発見されたタニ窯跡群の予備調査の最終年度で、地形測量図の最終チェックのため、8月17日～8月29日の間、第1回目現地調査を行った。この現地調査によって窯跡群の地形図が完成し、編集作業と解説冊子の作成を始めた。12月15日～12月21日には第2回目の現地調査として、文化庁特番『いま！世界遺産への旅』でタニ窯跡群を取材するための調整と協力を現地で行った。第3回目の現地調査は2月12日～2月20日の間に行い、1999年度に行う発掘調査の体制準備を行った。

招聘事業は例年通り王立芸術大学卒業生3名を10月5日～12月24日の81日間招聘した。同じ時期にロンドン大学からElizabeth Moore氏を招聘し、文化庁の招聘で来日中のAng Choulean氏と国際セミナーを11月27日に研究所で行った(本書57頁参照)。

(西村 康／杉山 洋)



タニ窯跡群A群地形測量図 1:700

在外研修の成果

古代東アジアにおける冠帽等の装身具に関する研究

毛利光俊彦／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1998年9月1日から11月25日にかけて中華人民共和国に出張し、冠帽から靴に至る各種の装身具について、出土品や古墳・石窟寺院の壁画・彫刻などを調査研究した。訪問地は北半の吉林・遼寧・河北・河南・陝西・甘肅各省と、南の江蘇省に及んだが、中国社会科学院考古研究所や各省の研究所・博物館の厚誼によって、多くの成果を得ることができた。

冠帽については、吉林・遼寧両省で、高句麗や鮮卑の金属製品を種々実査できたのが第一の収穫。甘肃省莫高窟では、供養者像や説法図に傾注し、隋・唐代の中華の制と、周辺諸国人の夷俗との対比をみた。各地で展覧中の俑や彫像を通して、文・武官以外に侍臣を冠から特定できることにも気づいた。

腰帶については、各地で各時代の遺品をみた。陝西省の白玉鑲帶は北周(557-581)で、鑲帶としては最古級である。唐代には丸鞚・巡方の銅板が一般化するが、丸鞚の起源が鑲帶の円形銅板にあるのではと予測している。なお、唐の乾陵(第3代高宗・則天武后陵)の石人がしめる帶の丸鞚・巡方は、腰佩をとりつける右側のみにあることに気づき認識を改めた。

靴については、日本・朝鮮半島の古墳出土金属製品に、前後綴と左右綴があることから、その起源を探した。皮や布の遺品は漢代からあったが、いずれも前後綴。新羅の左右綴の探求は今後の課題である。

唐・乾陵の石人の腰帶と腰佩